

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

番定賢治

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程

【研究題目】

日本外交の国際主義的契機

——1920年代における国際連盟と多国間枠組みへの関与

【研究の目的】(400字程度)

第一次大戦以後の世界では、初の世界的国際機関として国際連盟が創設されるとともに、それに連なる多くの専門機関も創設され、多面的に平和のための制度設計が模索された。その流れの中で、日本は国際連盟常任理事国として重要な位置を占めていた。先行研究では、日本外交が国際連盟やそれに連なる国際機関と関係を持った多様な機会が紹介されてきた他、国際連盟での特定の政策分野に関する議論と日本外交の関わりに焦点を当てられてきたものの、国際連盟と日本外交の関係についてその一部分をもって全体を説明する傾向があった。報告者は、以上の問題点を克服し、国際連盟や関連機関による多様な活動が日本の外交政策や対外関係にどれほどの影響を与えたのかを再検討するべく、国際連盟や関連機関の活動のうち先行研究で検討されていなかった分野の活動と日本の外交政策の関係や、国際連盟事務局や関連する民間団体の活動が国際連盟と日本政府の関係に与えた影響を、歴史的資料に基づいて検討することを試みた。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、まず国際連盟と関連組織の活動の中でも戦争の抑制という大目的に直接関わる問題に対する日本政府の対応について、仲裁裁判条約の締結や常設国際司法裁判所での応訴義務の受諾など国際裁判を推進する動きや、国際連盟での軍縮会議開催に向けた各国の議論に対する日本政府の対応を事例に検討する。次に、移民問題や通商問題といった経済社会分野での多国間協力など、国際連盟の活動の中でも平和を間接的に支える活動として推進されていた活動に対する日本政府の取り組みについて、外国人労働者の平等待遇や通商衡平待遇を求める動きを中心に検討する。三番目に、日本において日本政府以外の組織がどの程度まで日本政府の国際連盟への関与を支援していたかを明らかにするべく、国際連盟事務局の日本への関与拡大の過程とそこにおける日本人事務局員の役割を検討するとともに、民間団体である日本国際連盟協会が国内における宣伝教育活動や各国の国際連盟協会の連合組織である国際連盟協会連合会での活動を通じて日本国民と国際連盟の関係強化にどの程度の影響を与えたかを検討する。

報告者は研究助成期間において、上記の検討課題のうち特に国際連盟事務局の日本への関与拡大の過程とそこにおける日本人事務局員の役割を検討すべく、日本国内の外交文書(主に外務省外交史料館所蔵「外務省記録」「外務省茗荷谷研修所旧蔵記録」)における国際連盟事務局に関する史料を閲覧するとともに、2017年12月と2018年9月の2回にわたり、スイス・ジュネーブの国際連盟文書館(League of Nations Archive)

にて史料調査を行った。具体的には、国際連盟事務局の人事において日本人職員がどのような待遇を与えられていたのかを検討するべく事務局の人事に関する文書を閲覧した他、国際連盟事務局の活動が日本や日本を含む太平洋地域に拡大していった過程における事務局日本人職員の活動を検討するべく、国際連盟事務局東京支局の開設に関する文書、太平洋問題調査会大会における国際連盟事務局のオブザーバー参加の決定に関する文書を閲覧した。

【結論・考察】（400字程度）

研究助成期間に収集した史料から、以下のことが明らかになった。まず、国際連盟事務局の日本人事務局員は他の常任理事国と比べて少なく、配属先も人数が多い部署に限られていた。次に、それでも日本人事務局員は国際連盟事務局東京支局創設のきっかけを作るなど、日本における国際連盟に関する宣伝を拡大する上で重要な役割を果たした。また、日本人事務局員は太平洋問題調査会と国際連盟事務局との協力関係を築くことに積極的であり、それは太平洋問題調査会への国際連盟事務局からのオブザーバー派遣につながった。

以上の研究結果について、報告者は助成機関終了後の2018年11月25日、史学会研究大会（日本史近現代部会）にて「国際連盟事務局の対日関与と日本人事務局員——「新渡戸神話」の実像」と題して研究報告を行った。現在、同学会報告をもとに論文を執筆しており、それは『国際政治』第198号（特集『ウィルソン主義』の100年）に掲載される予定である。